

日本キリスト教会大阪北教会
2016年12月4日 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ルカによる福音書1章39節～56節

01:39 そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。01:40 そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。01:41 マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、01:42 声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。01:43 わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。01:44 あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。01:45 主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いです。」01:46 そこで、マリアは言った。01:47 「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。01:48 身分の低い、この主のはしめのためにも目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人でもわたしを幸いな者と言うでしょう。01:49 力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、01:50 その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます。01:51 主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、01:52 権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、01:53 飢えた人を良い物で満ちし、富める者を空腹のまま追い返されます。01:54 その僕イスラエルを受け入れて、憐れみをお忘れになりません、01:55 わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」01:56 マリアは、三か月ほどエリサベトのところ滞在してから、自分の家に帰った。

説教 『わたしの魂は救い主なる神を讃えます』

◆皆さんにすでにお知らせしておりますし、今日の週報にも掲載しておりますように安藤輝男兄はこの2日に御許に召されました。そして今日午後2時から葬儀をおこないます。私が大阪北教会に赴任しまして22年半になりますが、日曜日の礼拝の時に棺を置いて礼拝を捧げますのは、今日が2度目であります。1度目は、井上哲也長老のお母さんの井上壽美姉の時でありました。もう20年近く前のことでもあります。その時も今日のように、棺を最前列中央に置いて、共に礼拝をいたしました。葬儀の時には棺は中央横向きに置きますが、今は、脚は講壇側に、縦においております。起き上がれば皆さんと同じよう姿勢になるように葬儀社さんに置いて頂きました。わたしたちはこのように主の復活を記念する日曜日に礼拝を捧げているわけですが、天に召された兄弟姉妹と共に、目に見える形でもこのように共に礼拝をささげるのは2回目であります。他の教会ではあまり記憶がないですね。皆さんもあまりないのではないのでしょうか。しかしよくよく思いをいたせば、天に召された兄弟姉妹も、なお地上の歩みを致します私共も、常に共々に復活の主を仰ぎ、神様を共に礼拝しているわけでありまして、今日は天に召された安藤輝男兄と共に、この

ように見える形で共に礼拝を捧げているのであります。私たちの日曜日毎の礼拝はこの数十人の礼拝者だけではなくて、先に天に召された数え切れない兄弟姉妹たち、代々の聖徒達と一緒に、私たちは神を礼拝しているのだということをわたしたちは、今日またこのように安藤輝男兄と共に覚えることができ、誠に幸いであります。

◆それに致しましても、わたしたちの思いのほか早く、主は安藤輝男兄を召されたのであります。ご家族にとっては、悲しみは深いのでありますが、私自身は、この礼拝の備えと午後の葬儀の備えを、同時にいたしました。そしてそこに、共通のもの事柄に思いが導かれたのであります。それは何かと申しますと、「讚美」であります。神様をほめたたえる。今日の聖書の箇所は、有名な「マリアの賛歌」が記されているところであります。只今司会者によって朗読されましたが、私は今回、安藤輝男兄をお送りする中で、今一度新たに思い知らされたことは、この「聖書」というものがいかに恵みに満ちあふれているものかということでありました。そしてこの私がおのことに気付くことがまことに少なく、薄いものであったかを、改めて思い知らされました。繰り返して申してきましたように、聖書のことを英語で、「オールドテストAMENT」「ニューテストAMENT」と言いますが、「テストAMENT」というのは「遺言」という意味だと繰り返し、申してきました。聖書は、イエス様の遺言であり、神様の遺言であります。それは「神様の決定的な、究極の御意思の表明」であります。そしてそれと同時に、ここにいる私たちが相続する遺産のリストでもあります。聖書に書かれていることは全部神様が私たちのために用意してくださる質、量ともに、この上ない遺産のリストであります。そして、私たちが、どのようにしても把握し切れないところの神様の恵みを記しておりますし、そのことへの感謝の表明が「賛歌」であります。

◆少し以前から週報中段の上部に、礼拝の「招詞」として読まれます詩篇第 117 編を掲げるようにいたしました。「すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ。主の慈しみとまことは永久に、私たちを超えて力強い。ハレルヤ」。詩編 150 篇中、一番短いこの第 117 篇が賛美しているその中身は、わたしたちの思いを遥かに超え、祈りを遥かに超えて力強いし、それは永久に絶えることはありません。そのような恵みと真に満ちて居給う神様をわたしたちは礼拝しているわけですから、賛美のない、感謝のない礼拝などというのはあり得ないことであります。聖書を通して神様の御恵みを知らされた者の、心の底から溢れ出た感謝を表明したものが「讚美歌」ですね。ですから聖書と讚美歌は一對のものであります。ですから、賛美が生じるのは、わたしたちが神の恵みに目覚めた時であります。「マリアの賛歌」よりも、47 節 8 節でマリアは「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです」と申しております。神様は、わたしたちの人生のどの時点においても、わたしたちに目を留め、顧みてくださるのです。本当にそのようにわたしたちの人生は、一瞬、一瞬が神様の御顧みのひと時、ひと時なのですね。難しいことでなくて、わたしたちお互いに自分の人生で、もしあの時、あの一コマが

なかったら、今・ここにいる私たちはなかったのです。本当に、今まで生きて来た人生のほんの一瞬がなかったならば、そこで私たちの人生は途絶えているのです。それはすべての人がそうなのです。本当に主の顧みは永久なのです。神様は始めも、終わりも、中ほども、変わりなく臨んでいてくださいますけれども、私たちがそのことに気づくのは、いつも後になってからです。

◆この「マリアの賛歌」と言われる賛歌を歌っておりますマリアはまだ10代の後半、16～7歳の少女、乙女といったらいいでしょうか、その年頃です。毎年、待降節・アドヴェントの時期になりますと、そんな少女が、このような賛歌を歌うことができるだろうか、という疑問が出されます。しかし一昨年、ノーベル平和賞を受賞したパキスタンのマララ・ユスフザイさんは、17歳でした。しかし、マララさんの単純な言葉がすべての人の心に届くのです。そしてその言葉が平和に貢献しているというのがノーベル平和賞なのです。2000年前のマリアさんもその年ごろ、ですから、「マリアの賛歌」は、マリアさんの心から溢れた賛歌だったと思います。

◆マリアは天使ガブリエルの御告げを聞きました。先週の最後のところで、「神にできないことはなに一つない」と御使ガブリエルが言いますと、マリアはそれに応じて、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」と答えました。ガブリエルはその時に「あなたの親類のエリザベトも年は取っているけれども男の子をみごもっている。不妊の人と言われていたのに、もう6か月になっています」ということも、御使ガブリエル言っているのです。それで、「神にはできないことは何一つない」ということを御使が言い、そしてマリアは「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」と応じます。けれども、その足でマリアはエリザベトをたずねるのです。それが今日読んでいただいた箇所です。高齢になって身ごもることは、マリアの先祖アブラハムとサラの先例があります。その恵みにザカリアとエリザベトも与ったのです。

◆しかし43節でエリザベトは、「わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう」と言っております。ここで、「主」とは、神様の事でもあり、イエス様の事でもあります。神の独り子であられるイエス様をマリアは身ごもっているわけです。ですからマリアさんは「主のお母さま」「神様のお母さま」と言っているわけです。エリザベトは言います。「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方はなんと幸いです」と。わたしたちは、「神様の恵み」ということを、繰り返し口にいたしますが、神様の恵みには終わりがありません。わたしたちの理解、認識は、年と共に進んで行くのですけれども、神様がなさってくださることに対しては、人間は後追いしかできません。わたしたちが、限りない神様の恵みに気づくには、ずいぶん時間がかかります。しかし、そのようなことがおこりましたと、聖書は記しているわけです。45節で、エリザベトは言っております。「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いです」と。それで、マリアは御使ガブリエルが告げた御言葉の確かさを、エリザベトがマリアに語った言葉を通していよいよ確信するわけがあります。

◆神様がなさってくださったことは、わたしたちの理解をはるかに超えております。先祖アブラハムに施してくださったこと。そして「あなたは祝福の基・源となる」と神様はアブラハムに言われました。その祝福をイスラエルの民は継承しています。その神様の祝福が途絶えなかったのも、ここにマリアという存在もあるわけです。そしてマリアは 48 節でこうっております。「身分の低いこの主のはしためにも目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も わたしをさいわいな者と言うでしょう」と。ですから、わたしたちプロテスタントのキリスト者の信仰は、神のなさってくださることに対する驚き、それゆえの感謝、賛美は、これは、カトリックであろうがプロテスタントであろうが、キリスト者すべてのものですから、分け隔てなく同じ憐みをもって、聖書にかかっているすべてのことが、わたしたちにたいする恵みなのですね。

◆オリンピック会場どうするかという議論が続いています。会場の作り方をちょっと変えるだけで、何十億円も違ってきます。もったいないと言えばもったいない。しかし、私たちは、今日の聖書を読んでいて、私たちが与っている神様の恵みは、桁違いな恵みだという事を思い知らされます。わたしたちが現に与っている恵みは限度がないのです。『神の憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます。主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。その僕イスラエルを受け入れて、憐れみをお忘れになりません、わたしたちの先祖におっしゃった通り、アブラハムとその子孫に対して永久に。』

◆神様はわたしたちを決してお忘れになりません。誰一人その御顧みから漏れることはありません。それ故に、必要な物を、必要な時に、必ず備え、与えてくださいます。そういうことであります。今年のクリスマスは、12月25日であります。神様が為さって下さった、そして常に為さって下さる愛と恵みの奇跡を讃えつつ、クリスマスを迎え、また新年に向けて行きたいと思っています。そしてわたしたち自身が、わたしたち一人、一人が、その愛と恵みの神の相続人であるのですから、その信仰と自覚を持って、賛美と感謝の一日一日を送ってまいりたいと思います。

◆お祈りいたします

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。

待降節を迎え、毎年のように、あなたの御言葉である聖書の同じ箇所を読みます。そしてあなたは、この年安藤輝男兄を御許に召し給うことを通して、わたしたちにあなたの大きい恵みをはっきりと新たに示してくださいました。わたしたちそのことを心から感謝いたします。神様を宿すのは、マリアさんただ一人ではなくて、わたしたち一人一人の内にもあなたは生きて働いておられます。どうかわたしたち一人一人がその生き証人として、賛美と感謝の日々を歩ませてください。この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げ致します。アーメン。